



五十嵐英明さん(請戸)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島
取材日：11月8日

漁師として生き、 請戸の漁業の伝統を若者に伝えたい

3代続く漁業家で、震災前はほっき貝を漁獲していた五十嵐英明さん(66歳)。現在は奥さまと2人、南相馬市の借上げアパートで暮らしています。漁業が再開できない現状に悔しさをにじませつつ、「町が復興し、若い世代が漁業の伝統を引き継いでくれる未来」を見据えた取り組みが必要と話してくれました。



▲原ノ町駅近くの市立図書館の庭にて

■九死に一生を得たあの日
請戸に住み、15歳の時から漁に出ていました。浪江で一番の思い出は、漁業の仲間たちと年1回、家族旅行を楽しんだことです。しかし、一番若かった仲間は震災の犠牲になり、未だにご遺体も見つからない。なんともやりきれない思いがします。震災当日は、私も九死に一生を得ました。保育園と小学校に通っている孫たちの無事を確かめた後、家内と一緒にいったんは車で逃げたけれど、「津波の高さは6メートル」という放送を聞き、油断して自宅近くに戻っ

た時、津波に襲われました。黒い壁のような波が押し寄せ、あっという間に流されました。なんとか助かったのは、請戸川の岸に建っていた二階家の屋根に上ることができたから。救助隊に助け出されたのはその日の夜で、30分遅かったら命がなかったと思います。目の前で流されていった人もいて、そのことを思い出すのが一番辛いです。避難先のいわき市で家族と再会したのは5日後の3月16日。家内は私の死を覚悟していたし、私も家内は助からなかったかもしれないと思っていたので、心底ほっとしました。その後、長女の住む茨城県古河市で2年ほど暮らしましたが、仮設住宅の申込みに当選したのを機に南相馬市に移り、今年の8月からは南相馬市原町区の借上げアパートに住んでいます。

■風評被害の払拭に向けて
南相馬市に移転したのは、浪江に少しでも近いところに住み、体が動くかぎりは漁師として暮らしたかったからです。けれど原発の汚染水問題の影響もあって風評被害がひどく、漁業再開のめどは立っていません。

明日、小名浜の魚市場で風評被害を払拭するためのイベントがあるんです(11月9日に開催された「いわき魚まつり」。試験操業で獲った魚を、モニタリング検査をして「安全です」と分かってもらった上で皆さんに味わっていただく。こういったイベントを福島県だけでなく、全国で開いてほしいです。全国の漁協が協力し、国が予算を付けるといった仕組みも必要だと思っています。そして漁業関係者も今以上に勉強して、安全性をきちんと伝えられるようにならなくちゃいけない。最大の課題は風評被害の払拭です。

請戸は、江戸時代から漁業で栄えた歴史があります。そんな故郷に将来、若者が帰って来てくれた時、何もない町では困る。漁業をやりたい若者がいたら漁師として生きていけるよう、私たちには伝統を残し、下地を作っておく責任があると思っています。そして浪江に戻りたい町民が安心して暮らせるよう、復興住宅や生活環境の整備を進めてほしいと願っています。

浪江の こころ通信



・第42号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

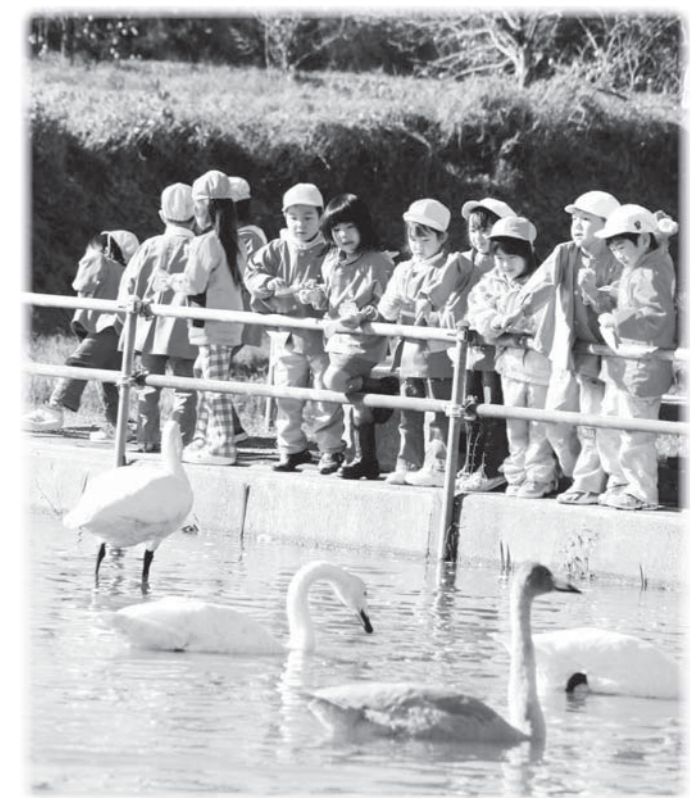
※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ 再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。
3・11から3年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第42号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243 (22) 4218





佐藤 博美さん(北幾世橋)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田
取材日：11月5日

子どもたちの成長を近くで見ることができる幸せ 私が頑張ることができる原動力です

息子・翔くん、娘・綾ちゃんと共に山形県中山町で暮らす佐藤博美さん。夫・勝文さんは、現在、福島県内に単身赴任中です。泣いて悩んで考えて、でも前に進まなくてはいけない中、まず心にひとつの区切りがついたのが昨年3年目だったそうです。この3年間で、翔くんは勝文さんの背を、綾ちゃんはおばあちゃんの背を超えるくらいに成長しました。佐藤さんが、日々の中で子どもたちの成長を見守り、家族を大切に思う気持ちが伝わってきました。



▲博美さんと綾ちゃんと一緒に

翔は、山形の高校に進学し、野球部でレギュラーを目指し頑張っています。昨今の今頃は、どの高校を選ぶかとても悩みました。元々、3年を目安に福島に戻ると話していたこともあり、選択肢に福島もある、でもここにいたいという気持ちで過ごしてきたのだと思います。そんな時遠征先のいわきで、スポーツ時代ずっとバッテリーを組んでいた友達と対戦する機会がありました。相手のチームでなくてはならない存在として頑張っている彼の姿を見て、自分も山形で頑張る覚悟を決めたように感じました。浪江で積み上げた

ものを無くしてここからスタートというのは、子どもなりに辛かっただろうと改めて感じた時でした。避難当時、友達と小学校の思い出話もできず、中山町の話を聞かされてもわからなかったことが、一番の心の傷だったようです。でも、ありがたいことに今は同じ中学校野球部を卒業した先輩に大会などで会うと声をかけてもらえるようにもなり、ここでの3年があったからこそぞと嬉しく思っています。綾は、ミニバスケットボールのスポ少で頑張っています。この家に越してきてから一人部屋ができたので、友達を連れてきて遊ぶことができるようになりました。「幾世橋のおうちみたい」と言います。中山町の方から助けていたでいて、何の不便不安もなく学校生活を送らせてもらっていることが一番安心しているところですね。

私は今、綾の通う小学校で絵本の読み聞かせ活動に参加しています。本一冊でも伝えられることは大きく、本で自分の思っていること、気持ちを伝えることもできます。浪江でもこうした活動をしたかったですね。いろいろな出会いや経験があるこ



佐藤 啓子さん(棚塩)

取材者：特定非営利活動法人おおむた・わいわいまちづくりネットワーク 彌永
取材日：11月1日

浪江の皆さん、 私たちは九州で元気に過ごしていますよ

佐藤さんご一家は、宮崎県宮崎市で三世代8名+愛犬のクーちゃんと暮らしておられます。「浪江のこころ通信～震災後3年間の記録～」を暗記するほど毎日読んでおられるお父様をはじめ皆さんから、とてもこの紙面には収めきれない沢山の想いを聞かせていただきました。



▲お母様(陽子さん) お父様(忠夫さん) 啓子さん
クーちゃん お姉様(松田香さん)

浪江では、権現堂の東邦銀行の向かいで公文式の学習塾を開いていました。幼児から高校生を相手に、大好きな仕事でした。3月11日、次女と二人で近くのヨークベニマルで買い物をしていたら、これまで経験したことのない大きな地震が来ました。その時は、津波とか原発の不安は全くなくて、家にいた両親は大丈夫か、地震の被害で、もうこれまでと同じような暮らしはできないのだろうか、と考えていました。幸いにも、当日のうちに家族の無事は確認できまし

たが、避難所で父の体調が悪くなり、薬の入手も大変だったことから、まずは少なくとも薬が手に入るころへ、そして子ども達を放射能の被害から守りたいとの思いで、姉が嫁いでいた宮崎へと避難することになりました。吹雪の中を出て、3月19日、東京駅に着いた時は、着の身着のまま。柱の影に固まって、子どもたちは何も尋ねず、泣きもなくて、それが余計に心配でした。

公文の生徒たちには震災直後に電話をしましたが、全員と連絡が取れたのはもっと後です。しばらくは、公文の青い看板を見るのも嫌でした。10年間心血を注いで、人と人との信頼を築いてようやくできてきたことが一瞬で無くなってしまい、心をもぎ取られたような気持ちでした。震災から一年過ぎたころ、ご縁があつて宮崎の公文の教室でお手伝いに入りました。やってみると、子どもたちの学ぶ姿に、また心に火のついた感じになり、2013年4月に、宮崎で教室を開くことにしました。宮崎で仕事も見つけ家も建てましたが、浪江に帰りたいという想いはどんどん大きくなって

います。先日は、昔からの友達が訪ねてきてくれました。どこかへ観光案内しようと思つていましたが、結局、ひたすら取りとめのない話をしていました。友達が帰るとき、「また来るね」と言つてもらつたけど、なんだかまた一人ぼっちになつてしまったような気持ちです。

子どもたちも環境が大きく変わってしまったのに、この間よく頑張つていたと思います。ただ、一度、元の学校の担任の先生から電話をいただいたことがあり、その時は、子どもたちは電話口ですつと泣いていました。親の前では泣けないんだな、とも感じました。子どもたちには、震災に遭つたからと、何か特別に頑張るとかいい子になることはしなくていい。普通の子どもの暮らしをして欲しいと思つています。